

【巻頭インタビュー】

最年少知事、鈴木英敬・三重県知事に聞く

東日本大震災など、我が国を取り巻く環境は厳しく、今日ほど日本の変革が求められる時代は無い。三重から日本を変えていこうとする全国最年少知事、鈴木英敬氏三重県知事に、その変革の志を伺った。（聞き手 矢野、中原）

——知事はどのような理由から官僚から政治家へ転身されたのか、そして政治家になる前になった後のギャップについて、以上二点についてまず伺いたいのですが。

「二つ大きくあって、一つは政治の世界で改革が進んでいないこと。僕が経験したことで言うと、安倍政権、安倍さんが総理大臣の時に、僕は総理大臣官邸でスタッフをしていたのね。例えばゆとり教育見直しを総理がやりたいと言っても、文部科学省の人が反対するわけですよ。ゆとり教育の見直しは、大半の人がやってくれと国民の皆様も言っていたにも関わらず。

それを総理がやると言っているのに、官僚が抵抗すると。一方で、そういう抵抗する官僚の人たちに、当時与党の人たちは、政策について丸投げしているわけですよ。足をひっぱる人に政策を丸投げするなんて、こんな訳分からん状況があつては良くない。それはおかしいんじゃないか、と思つて。じゃあ、足をひっぱらない官僚になるか、それとも、丸投げしない政治家になるか、と思つて僕は後者を選択した。それは、スピードの観点でね。足をひっぱらない官僚になるようになって、時間がかかる。でも、日本や世界の状況は待たなし、と。じゃあ政治の側において、政治の側を変える活動をしようじゃないか、というのがまず一つ目。

二個目は、消極的な理由ですが、官僚の限界とかな。経済産業省という一つの組織にいと、ただだけ日本のことを考えても、省の枠の仕事しかできない訳やな。逆に例えば知事やと、今すべての範囲のことをやらなきゃいけない訳や

な。僕は経済産業省にいて日本を良くしたいと思つた。そういうときに、分野が限られているということや、物事を変えていくスピードに限界を感じたつていう、そういうことかな。

政治家になる前と後のギャップ……。言葉に気をつけるようになったかな。特に知事なので、国会議員七二分の一と違って、三重県知事は世の中にたった一人なので、やっぱ言葉やその一挙手一投足に責任があるから。」

——知事は毎日ぶらさがり会見をされ、現場の方にもかなり出でらっしゃいますよね。これは自分が正しいと思う行動だと思つてですか。

「うん、そうですね。まあ、僕らは税金で給料をもらつて、政治や行政の仕事をしているわけですよ。そうすると、こういうことが起こっているのか、今何をしようとしているのか、そういうことについて県民の皆さんに広く知っていただく必要がありますよね。そうするとそれは、機会を増やすということがまず一つ一番ええ方法やと。なので、メディアを通じて、ぶら下がりということで僕の言葉を届け、こんなことやってます、こんな風に考えてます、と。今まで三重県知事は定例会見というのを二回、月に二回しかやらなかったのね。僕はそれを毎日することで発信して、自分の言葉を伝える。



「今年度中に南部地域活性化プログラムっていうのを作る予定でいま議論をしています。何かっていうと、社会的人口流出が多いので、南部の方に仕事を作ります。仕事ができれば、そこで皆住んで、そこで税金も納め、物も買い、っていうふうになって、経済も循環して活性化していくので。まず仕事を作るっていうのをどう考え、次にその支援をどうすればいいか。農業とか漁業とか、あるいは観光業とか、そういうのを組み合わせ、若い人に魅力とと思ってもらえるような仕事を如何にたくさん作るか。」

——今までの知事の取り組みを踏まえて、今後この政策課題をどう解決されますか？

「まあ解決というのはどういった段階に至ると解決なのかっていうのはありますよね。例えば、自分たちが生きていて世界で一番幸せだと思っている人はどの国の人たちか知っていますか？アルゼンチンなんですよ。でもアルゼンチンはああやって債務、つまり国の財政が破綻しているわけですよ。一方、一人当たりGDPが世界一となったシンガポールの人たちは幸せ度が低いんですよ。なので、活性化とは何なのか、解決とは何なのかということも大切だと思いますよ。その所々の経済状況や生活環境に合わせて住民の皆様が『幸せだな』と感じてい

ける生活を営むという事が大切だと。それぞれの地域の実情に応じてどうしたらよいのか、そう考えたらずは仕事を作ることからスタートするんじゃないかなと思いますね。」

——そういった観点から幸福実現度ナンバーワンを目指しているようにとされているんですね。

「まあみんな三重に取材に来ているから分かつと思うけど、三重県の南端に紀宝町という、今回災害が大変だった地域と、四日市に住んでいる人たちが同じ幸せを追求すべきか、というと僕は違うと思うんだよね。それぞれの地域にそれぞれの人たちの幸せの形があつて。僕はそういうした実感を大切にしたいと思つて、今回新しいビジョンになっているんですよ。」

結構リスクなんですよ、行政としては。結果出ないかもしれないですよ。でもそれをやらなきゃだめだと思ふんだよね。今までみたいに、『幸せの実感』は皆さん勝手にしてください。我々はインフラを整えますわ』じゃ。幸せな国になっているかフタをあけてみると、そうならない、そう思いますね。」

——三重県経済としてどの分野が今後重要になっていくか、知事の展望はいかがでしょうか
「僕はまず、日本全体の中における三重の役

あるいは、現場に行つて、なるべく現場に行つて自分の声を伝えていると。それはさっきも言ったように、僕たちが税金でお仕事をさせていたでいてるので、こういうことが起こっているのかを知ってもらふ権利があるし、それをおかしいと思つたらそれを直せる権利が県民の皆さんにあるわけなので、その権利を行使してもらふための機会を僕は提供しています。」

——三重県には昔から「南北問題」がありますが、これについては今後、どのような対策を講じられようとお考えですか。

割というものがあると思っています。東日本大震災があつてこの状態で東日本特に東北地方が中心となつて日本のものづくりを支えていく、そういった事は不可能だと思ふんですね。だから三重県や愛知県といった中部地域が日本の中でもものづくりをリードしていく役割を果たしていけないといけないと僕は思っているのです。

じゃあ、三重県の経済をどうしましょうかそう考えた時に、今円高、デフレ更に空洞化懸念がある中で、どっかの産業に偏るということで、例えば自動車とか電機とかの半導体などの輸出産業、それはアメリカとかヨーロッパといった先進地域にたくさん売って買ってもらふという産業だけど、さっき言った懸念がある中で日本のものづくりをリードしていくことはできないので、環境とか省エネも含めた、それぞれを強い産業にしていく事がこれからの命題です。

三重県には中小企業がたくさんある中で、そこには素晴らしいモノづくりを含めて、沢山の技術があります。彼らが如何に海外展開、三重の事業所に拠点を置きながら、取引をして、富を増やして、利益を得て、成長していくことができるかということを目指す目標にして、強靱で多様な産業構造を作るんだけど、そのためには中小企業が利益をあげるような構造にしていきたい。まず今ある中小企業の人たちが、三

重県に拠点を置きながら、如何に利益をあげていくかを支援していくのが僕のポイントです。」



——今日は三重県の風水害対策の象徴的な日（伊勢湾台風が潮岬に上陸した日。「みえ風水害対策の日」）で、また三月の東日本大震災等で、災害に対する関心が高まっていますが、県の防災対策の今後について伺いたいのですが。

「三月十一日の東日本大震災を踏まえてという事でいけば、緊急地震行動計画というものを、もうすぐ発表します。これは特に行政がこんなことやるっていうことだけじゃなくて、自

分が自分の命を守るというためにこんなことして欲しい又はそれをするために、避難所や避難経路、情報通信手段や電源の確保とかを行政が支援しましょう、そうした自助を支援します。

後、共助。その自分の地域、家族、企業の仲間、そういう人たちと助け合うための支援をしましょう、それも、情報通信手段とか、あるいは、要援護者の名簿であるとか、そういうものを、最大級の津波がきても、被害を最小限に抑え命を守るための計画というのをもうすぐ出します。それを前提として県独自で津波浸水予測調査を、国は三月十一日の東日本大震災を踏まえて被害想定の見直しをしているのだけれども、それを待っていたら遅いんで、東日本大震災と同レベルのやつが来たらどこまで津波が浸水するか、川がどこまで潮上してくるか、そこに公共施設や避難所がどこまで該当するか、そういったことと一緒に、緊急地震行動計画として出します。後は、今回の台風十二号。本県でも死者の方が二人おられ、行方不明の方もあと一人おられるんですけど、その情報収集とかを。今までみたいのでつかい堤防を作れば、命を守るっていうのではないので。災害は発生するという前提のもと、発生した時に被害を最小限にするかっていうことやね。減災ってよく言われるけれども、これも行政としてはな

なか勇氣のある発言なんです。『防ぎきるのは無理です』って言い切るのは。その上で、みんなにどう命を守ってもらうかを考えてもらう方がね。僕は今回、十年間の三重県のビジョンみたいなものを出して、そのひとつのコアのコンセプトが『アクティブ・シティズン』って言うてます。これは、ケネディが大統領就任演説のときに言った言葉ですけど。それぞれが自立し行動して、主体的に自分のこと、仲間のこと、家族のこと、地域のことを守っていく、そういう市民、国民、県民でなければならぬという意味なんです。防災においてもそうだと思います。」

——三重県議会事務局へインターンシップに来る学生も含めて、本学の学生に対してメッセージを一言お願いします。

「我々執行部が県民の皆さんの望んでいる事をやっているかどうか、それをよくよく見てほしい。本当に三重県の皆さんが、自分たちの故郷三重県が良くなる方向に進んでるな、と思うことを議会や執行部で議論できているかどうか、それをよく見てほしい。議会とか行政っていうのは自己満足的では駄目だと思うんですよ。県民の皆さんの幸せの実感に繋がっていないから意味が無いわけです。そういうことがやれているかどうかを、自分の目でしっかり確かめ

てほしい。その為には、是非県民の皆さんと喋ったり、フィールドワークをやってみるのが面白いんじゃないかと思います。十年二十年前の公務員と比較して、現在公務員に求められる能力とか人材像というのは明らかに違ってきていて。金が無いからできません、あるいは過去の



ルールがこうなっているからできませんっていうのは今、全く通用しなくなっている。そういうことを言わずに、自ら汗をかいて知恵を出して、お金が無くても県民や国民や市民の皆さん

が喜んでいただくために必死でやれる人になってほしいと思う。そのために努力を惜しまず、またこの時代に税金で給料をもらって仕事をするということの重大さを良く理解したうえで職務に当たってほしいと、そういう方向を目指してほしいと思う。」

——今日はどうもありがとうございました。
「皆さん頑張ってください。」

鈴木 英敬
すずき えいけい

昭和 49 年（1974 年）8 月 15 日生まれ。兵庫県出身（本籍地は三重郡菰野町）。平成 10 年 3 月東京大学経済学部卒業、同年 4 月通商産業省入省。地域経済産業グループ地域経済産業政策課課長補佐として、「地域間格差問題」や「農商工連携」などの仕事に取り組んだ。平成 20 年 2 月自由民主党三重県第二選挙区支部長となり、平成 23 年 4 月三重県知事選に当選。全国最年少の知事として、36 歳で三重県知事に就任した。